

## プロテスタントにおける教会と宣教の相互関係 ——宣教学的的一考察——

西岡義行

激動の二十世紀のから、新たな世紀に入ったとはいえ、二千年の宣教の歴史を回顧し、これからの宣教を展望することが十分なされているのだろうか。世界規模で考えるなら、十九世紀以来の近代化が二十世紀につきつけてきた問題は野放しにされ、人類の存続すらも脅かす環境問題に発展してきたことは周知の通りであろう。本論文では、教会と宣教の関係を目を向けて、今問われている課題が何であるかを問うていきたい。

さて、最大の危機は忍び寄る危機に気付かないことであり<sup>1</sup>、日本の教会の危機も、忍び寄る危機に本当の意味で気付いていないということにあるのではないだろうか。では一体私たちがどこにおり、どのような危機に直面しつつあるのかを捉えようとする営みをもって、教会に仕えることは、宣教学の一つの重要な使命である。日本の福音派の教会は、宣教の働きによって個人個人に福音を伝え、教会に導き入れるが、結局は閉鎖的な教会の世界を作り上げるが、その中に入ってくる人の数に一喜一憂し、歴史の現実とかけ離れてしまったという、批判を耳にして久しい。逆にその閉鎖性を打破して外に出て、社会の現実に入って社会の変革を訴えた人々も、実際は多くの教会で行き詰まっているとも聞く。もちろん、例外もあるだろうが、こうしたことが教会の閉塞状況と無関係ではないだろう。はたして、教会が潔さを保つ

ために世俗と一線を引くことと、混乱し腐敗した社会の現実には大胆に入っていくことと、どう関係しているのだろうか。その両者の間でどっちつかずの姿勢を取る中で、宣教の情熱を失ってしまったのみならず、世の現実に入っていくこともなく、にもかかわらず世の問題が教会に入り込んできているとしたら、それを放置することは危険なことである。教会のこのような傾向が生み出されるには、具体的な歴史的な状況や、神学的な背景があり、さらにそれらを見えないところで支える世界観が潜在している。今求められているのは、解決策である以上に、真の問題の所在を突き止めることであろう。この小論文で、その問題の核心に教会と宣教の分離があることを論じていきたい。

### I. 宣教と教会の類型論的考察

プロテスタントにおいて、教会と宣教は様々な形で捉えられて来た<sup>2</sup>。それらを手短にいくつかのタイプに分けて紹介したい。もちろん、このような試みは単純化による教会や宣教理解への誤解、曲解、偏見を招くことも考えられるが、あえてタイプに分けることでそれぞれの特性を明確化出来るという利点に注目したい。そこで、宣教と教会の関係には大まかに見て四つに分けられ、現在それら全てを乗り越える新たなタイプが模索されてる必要がある。まずは、その四つのタイプを概観してみたい。

#### A. 教会の付属物としての宣教

第一のタイプは、宣教を教会の付随的なものとし、特に宣教を海外や地理的、社会的、また文化的な境界線を越えた領域での働きとして認識されるものである。ここでいう宣教は教会の働きの中心というよりは、付加的なもの

---

<sup>2</sup> カトリックやギリシャ正教はここでは扱わない。しかし、これらもタイプとしては論じられる必要はある。タイポロジーとしては、Avery Dulles が *Models of the Church* で教会観を五つのモデルで論じているが、彼のモデルは、教会全体を扱うものであって、この論文では教会と宣教の係わりに焦点をあてている点に留意していただきたい。

---

<sup>1</sup> D. ボッシュ、『宣教のパラダイム転換上』19頁

とされる。このタイプに沿って「海外宣教」という言葉を理解するなら、宣教は海外においてなされるものであり、伝道は国内又は教会の置かれている場でなされる。実際海外宣教は、教会の力が充分備わり、その働きにおいても経済面においても、さらには人材においても余裕ができてから取り組む領域であるとされる。

付属物として宣教を見る場合、宣教活動も宣教師も、教会にとっては特別なものとされる。というのは、宣教は教会の回りの地域ではなく、国外または、社会的、地理的、文化的、民族的な壁を乗り越えたところに派遣するという意味で理解されるからである。宣教またはミッションは特別な派遣を意味し、教会の特殊な領域として位置付けられる結果、教会の働きは二分される。すなわち、教会形成に直接つながる伝道牧会の働きと、一定の領域を越えたところの「宣教」という区分であり、たいていは前者が後者に優先されるものとして捉えられる。特に西欧キリスト教国においては、宣教はもっぱら海外または国外での異教のはびこる地における働きを指していたのである。この教会と宣教の対立構造が如何に宣教に、また教会にもダメージを与えたかは、最近の宣教学において注目され始めている<sup>3</sup>。

## B. 教会の核としての宣教

次のタイプは教会の中核に宣教を位置付ける立場である。宣教は教会の特殊な部門でも働きでもない。宣教は教会の中心的な要素であり、それなしでは教会が教会ではなくするという意味で教会の中核を担っている、という理解である。ここでは、教会の存在そのものが神から派遣（ミッション）されたものであるとして、より広い視点で教会が理解されている。第一のタイプに見られたような宣教と教会の対立構造はここにはない<sup>4</sup>。

この新しい宣教と教会の理解においては、宣教なしに教会はなく、教会なしに宣教もない。両者の間にある種の統合がみられる<sup>5</sup>。さらにここでは、教会の全ての働きが宣教という視点で捉えられるのであり、宣教の働きが宣教師によって進められるというより、むしろ教会そのものによって進められると理解する。いわば、教会が神からこの世に遣わされた宣教師なのである。地理的または領域的な枠組みの中で宣教が捉えられ、宣教と教会の二元論的な分離が明確であった第一のタイプとは、根本的に違うものである。この新しい視点はまさにパラダイム・シフトであり、このシフトのゆえに教会の意義や宣教の在り方が全く新しい角度から再検討されるようになっていったのである。多くの宣教団体の集合を示唆する複数形 (missions) としての宣教から唯一絶対の神の宣教を示す意味での単数形 (mission) としての宣教が多くの人によって意図的に用いられるようになったことは、このシフトを象徴的に示している<sup>6</sup>。これは、実際宣教学の学術誌、*International Review of Mission*の名前も、*Missions* から *Mission* への変更があったことでも知られている。

## C. 教会を中心とした宣教

第三のタイプは、宣教の中心に教会を置くというものである。宣教の働きの一義的なものは、教会を開拓することであり、そしてその教会が成長することである。この教会と宣教の密接な関係は主に福音派に支持されているが、1960年頃まではエキュメニカル派の教会においても幅広く支持されてきたものである。

ここで、「宣教を核とする教会」と「教会を中心とする宣教」との間には微妙な違いがあることに注目していただきたい。もちろん両者とも宣教と教会

と宣教の関係については部分的にしか議論していない。

<sup>5</sup> Van Engen, *God's Missionary People*, p.30.

<sup>6</sup> Cf. Johannes Aagaard, "Trends in Missiological Thinking During the Sixties," p.13; Lesslie Newbigin *Truth to Tell: The Gospel as Public Truth*, p.121. 複数としての missions はより具体的な働きや団体を指すが、それら全てを神のもとに包括する単数としての mission が明確に区別されて行った。

<sup>3</sup> Charles E. Van Engen, *Mission-on-the-Way*, pp.148-56. Wilbert R. Shenk, *Write the Vision*, pp. 33ff. Douglas John Hall, *The End of Christendom and the Future of Christianity*などを参照。

<sup>4</sup> 宣教を教会の核にもってきたのは、今までの視点からのパラダイムシフトと言えるものである。ボッシュ(David J. Bosch)は『宣教のパラダイム転換』の中で、このシフトを宣教の神学という視点でより詳しく論じたが、彼はとりたてて教会

の密接な関係を保持しているが、前者は「神を中心」とした宣教観をもって、教会を再認識しているのに対して、後者は「教会を中心」とした宣教観であり、具体的には教会開拓、教会形成を宣教の働きの中心に置くことを意味している。敢えて極端に表現するなら、前者は教会が神によってこの世に置かれていること自体が宣教であるとするのに対して、後者は福音伝達によって回心した者の群れとしての教会を生み出すことなしに宣教を全うすることはないと主張する。教会成長運動はこの後者の流れに沿って、さらに数の論理や経営管理術などのプラグマティックな方向に展開されていったと見ることができる<sup>7</sup>。

#### D. 教会を越え世を軸とした宣教（神の宣教）

宣教と教会の構造的分離から脱皮した第二と第三のタイプでは、宣教と教会の密接な関係が違った仕方をもって表現された。しかし、再び教会と宣教との間に溝ができる視点が導入された。それは宣教を教会という枠組みを越えたところで捉えようとするものである。神の宣教は、教会の働きの及ばないところで既に始まっており、実際聖書においても教会の誕生以前に宣教は存在していたとして、教会を中心とする宣教への反動としてホーケンダイクによって主張され<sup>8</sup>、エキュメニカル派の特にその社会派において受け入れられた宣教観である。

この視点では教会ではなくこの世こそが宣教の場であり、具体的な社会の現実に神の支配をもたらし、そこに神の平和を実現することこそ宣教の中心である。もちろん教会そのものを否定してはいないが、教会の増殖と拡張を主目的とする教会中心の宣教は、世に開かれた本来の宣教を矮小化しているとして厳しく批判していくのである。

現代の宣教学における一つの重要な課題は、この宣教と教会とがどのような関係にあるかである。この課題は歴史的にも、神学的にも、聖書神学的に

も、さらに実際的にも検証されることが必要であろう。ここまでプロテスタントにおける四つのタイプを紹介したが、最近福音派の宣教学者の間にも、またエキュメニカルな立場の者の間にも、第三と第四を統合する動きがある。第二のタイプは最も聖書的であるように見えるが、実際は教会と宣教の関係について、神学的に展開されず、曖昧な表現や概念が充分深められなかった。この曖昧な理解には、解釈者の前提が入りこみやすく、宣教と教会の関係理解において、福音派とエキュメニカル派の主に社会派の立場を支えてきた前提がその後の第三、第四のタイプに表れたと理解できよう。宣教と教会のよりホーリスティックな視点を展開するには、西洋神学に支配的であった二元論的思考の枠組みを超えた新たな視点が必要であろう。しかし、それがいったいどのようなものであるかは、今後さらに探究されなければならない。

## II. 「宣教—教会」関係理解の変遷

新たな視点を擁立する前に、現在の問題をより総合的に把握する必要がある。そのためには歴史的変遷を理解することを避けて通ることは出来ない。以下の項では、現象をより共時的に扱うタイポロジーでは明らかに出来なかった通時的、歴史的側面に注目して宣教と教会の関係理解の推移を概観してみたい。

### A. キリスト教社会における宣教

四世紀のコンスタンチヌス帝の時代にキリスト教が国家の中でその地位を確立したことは、周知のとおりであるが、これを境にキリスト者は社会の周縁で、無視され、抑圧され、迫害される立場から一転した。それ以来、長期に渡ってキリスト教が社会の中心に組み込まれたのである。このキリスト教国家体制においては、世界はキリスト教国と非キリスト教国とに二分され、宣教は前者から後者への動きとして捉えられた。実際本格的な宣教活動はスペインやポルトガルといったカトリック諸国の方が時代的には先行していた。しかしそれは、十六世紀になってからであり、国家として世界との貿易が始まり植民地化政策がとられたことと重なっているのである。

<sup>7</sup> 拙論「教会成長論再考」を参照。

<sup>8</sup> J.C. ホーケンダイク、『明日の社会と明日の教会』

一方プロテスタントにおいてはその当時、宗教改革によって聖書信仰に立ち戻ったとはいえ、実際には世界宣教への発展は、少なくとも目に見える形では現われなかった。それは、例えば神の支配を強調する宗教改革の神学は宣教への動機付けにむしろ逆風となったこと、プロテスタンティズムの中にあってもそれぞれの派が対立していたこと、さらにはドイツにおける三十年戦争（1618～1648）による社会不安のゆえに目を世界に向ける余裕がなかったことなどが要因としてあげられる<sup>9</sup>。しかし、十七世紀の科学革命、十八世紀の産業革命などによって、プロテスタント諸国は次第に力をつけ、争うように世界進出し植民地化していった。近代のキリスト教諸国において見られた目覚ましい文明の発展によって、人類は今まで経験したことのないような形で地理的文化的壁を乗り越えていった。この歴史の事実の中で、福音が世界に伝達されていったことはまさに摂理の内であったと言うことが出来る。

しかし、宣教はいつも不完全な人間によってなされているゆえに、常に様々な問題を内在し、また露呈してきた。その問題を理解する上で重要なのは、その時代の西欧諸国を無意識のレベルで支えてきた世界観を検証することである。ここでは、それを詳しく分析することは出来ないで、その基本的な枠組みを把握することにどめたい。それは、前述したように、キリスト教社会のもつ二元論的な「キリスト教国—非キリスト教国」または「西洋—非西洋」という枠組みである。一方は文明開花し、他方は未開であるとして上下関係をそこに見ていく。宣教は暗黙の内に築かれていったこの世界観に沿って把握され、福音の流れは北から南へ、または西から東へという一方通行的なものとなった。この「西洋」から「非西洋」への単一方向的な宣教の枠組みは、十九世紀、さらには二十世紀に至るまで、教会と宣教の在り方を多くの部分で規定して来たのである。そして「宣教」がキリスト教社会の外での出来事として、また世界の周縁、遠い所においてなされる事として位置付けられていき、教会にとって余裕が出来てから取り組む付属物として扱われ

ることとなったのである<sup>10</sup>。

## B. 教会における宣教の新たな位置づけ

キリスト教社会の枠組みの中で形成された「宣教」は教会にとっては付属的であり、また伝達の在り方という点では一方通行的であり、その内容は西洋文明の模写として現われていった<sup>11</sup>。ここでは福音と西洋文明とが癒着し、非西洋文明は異教のもの、俗なるものとして基本的に否定されていくこととなったのである。宣教の一つの結果として出現してきた宣教地における新しい教会は、いかにも西洋風の様相を呈しており、土着の文化や人々との間のギャップが次第に問題となっていった。そのような中で宣教の在り方を根本から問い直そうとする学問、すなわち宣教学が発展していった。しかし、二十世紀に至るまで宣教学は明確なかたちで教会論との関係を築くことが出来なかったのである。

その背景となった状況を少し概観してみたい。まず、十八世紀の世界宣教は主にヨーロッパからの貿易商などの移住によってキリスト教が持ち込まれる形で広まるという傾向が強かった。とはいえ、宣教と教派的な教会とはそれなりに近い関係にあった<sup>12</sup>。それに対して、十九世紀以後のリバイバル運動を機に起されたプロテスタントにおける近代の宣教運動は、より明確なヴィジョンによって出ていくという傾向が強くなり、伝統的な教会や教団の枠組みを超えたところで進められていったのである<sup>13</sup>。さらに、教会と宣教の関係

<sup>10</sup> cf. Bosch, "An Emerging Paradigm for Mission," p. 491.

<sup>11</sup> シェンク、「文化脈化に向けて」現代の宣教パラダイムにおける三段階、88—92頁

<sup>12</sup> James A. Scherer, *Gospel, Church and Kingdom: Comparative Studies in World Mission Theology*, pp.10—11.

<sup>13</sup> 具体例として多くの宣教の働きはハドソン・テーラーによって始められたフェイス・ミッション・ムーブメントやR. P. ウィルダール、D. L. ムーディー、J. モットらによって始められた学生ボアンティア運動（Student Volunteer Movement）や、聖書翻訳協会などの超教派的な宣教団体が次々に宣教師を世界に送ったのである。これらは、既存の教派の枠組みを超えて一致しようとする方向にあり、これは、1910年のエディンバラにおける世界宣教会議に引き継がれていったのであ

<sup>9</sup> J. Herbert Kane, *A Concise History of the Christian World Mission*, pp. 73—75. cf. Bosch, "An Emerging Paradigm for Mission," p. 491.

は国内と国外という別個のものとして捉えられる傾向が強く、国を出て世界に向かう宣教においては、国内における教派の伝統を超えて一致しようとする動きが明確になっていった。しかも、教会論自体も、それぞれの教派的伝統を正当化する傾向が強く、本来の教会論からはかけ離れていた<sup>14</sup>。それゆえに、教派的伝統の差異を乗り越え一致して世界宣教に向かう宣教の精神と教派色が強くなっていた教会論とは、相入れぬものとなってしまったのである。

こういった教会と宣教の分離に対して宣教学的に疑問を投げかけたのが、ワーネック (Gustav Warneck 1834-1910) であった。彼は宣教が教会から遊離してしまうことで、教会は宣教の精神を失い、宣教も教会を見失ってしまっているという問題を指摘し、両者のあるべき関係が問われなければならないと主張したのである<sup>15</sup>。しかし、この課題が本格的に問われたのは世界大戦以後の国際宣教協議会 (IMC) においてであった。それは、植民地運動と平行して発展した「西洋から非西洋へ」という宣教の枠組みが世界大戦の終結と共に崩壊し、同時に宣教の意義そのものが非西洋諸国の宣教師の存在意義と共に疑問視される時であった<sup>16</sup>。そういった危機的状況において、1952年に開催されたウィリンゲンでの国際宣教協議会 (IMC) で、宣教は教会の付属物ではなく、むしろ教会にとって「中心的で本質的なもの」と位置付けられたのである<sup>17</sup>。ここにおいて「教会の核としての宣教」という新たな宣教理解 (第二のタイプ) がホーケンダイクによって提唱された「神の宣教」という視点で展開されていった。すなわち、「宣教」は教会や宣教団体が宣教師を遣わす (ミッション) ことである以上に、神ご自身がそれら全てをこの世に遣わしている (ミッション・デイ/神の派遣) と認識されたのである。宣教は教会の働きである前に神の働きであり、教会そのものが神から世

に遣わされているのだ、という神中心の宣教理解が明らかにされた<sup>18</sup>。ここに至りて、宣教が教会の存在意義と関わるものとしてより明確に理解されるようになった。

### C. 福音派の台頭とその宣教理解

国際宣教協議会 (IMC) と福音派の関係は複雑で、単純に二分出来ない。しかし、1950年代に少しずつ距離をもつようになり、1961年に国際宣教協議会が世界教会協議会 (WCC) に加盟したことで、その後の両者の分離はいよいよ深刻化し表面化した。1968年のウプサラにおけるWCC第4回会議はその対立が最も顕著に現われた時であった<sup>19</sup>。

さて、宣教と教会の関係は、福音派の流れの中において一つの強い傾向を帯びようになっていった。それは、「教会を中心とする宣教」 (第三のタイプ) と端的に表現出来る<sup>20</sup>。福音的、保守的流れの中心は1920年代にヨーロッパ、特に英国から、大西洋を越えて米国に移っていった<sup>21</sup>。宣教師の数においても、宣教団体の経済的支援の額の面でもアメリカが急速に力をつけていった。これは、様々なリバイバル運動の結実とみることが出来る。このような中で、個人的信仰の決断をより明確な形で強調し、信じた者の群れとしての教会の開拓ということが宣教の中心になっていった。1960年代になると、福音派の波はマックギャブランによって始められた教会成長運動と共に発展していったのである。

さて、この教会中心の宣教理解は、二十世紀以後の新しいものとは言い難い。むしろ十九世紀の宣教の実践と思索の中で形成され、二十世紀の福音派が新しい意味で展開したものとみることが出来る。「教会中心」とは、別の言

<sup>18</sup> cf. Emilio Castro, "Mission: An Ecumenical Perspective," p. 47.

<sup>19</sup> Yates, *Christian Mission in the Twentieth Century*, pp.195-97.

<sup>20</sup> バサーム (Bassham) は、"Mission Theology: 1948-1975," pp.53-54 で当時の福音派の特色として次の5つを挙げている。1) 個人的改心の強調、2) 聖書の逐語靈感説、3) 贖罪論の代償説の標榜、4) キリストの神性 (人性と対照的に) の強調、そして、5) 復活/再臨への強い信仰。

<sup>21</sup> Ibid., p.53.

る。See Timothy Yates, *Christian Mission in the Twentieth Century*, pp.17-24.

<sup>14</sup> Van Engen, *Mission-on-the-Way*, ch.7.

<sup>15</sup> Van Engen, *God's Missionary People*, p.37.

<sup>16</sup> Scherer, Gospel, *Church and Kingdom*, pp.19-26.

<sup>17</sup> Newbigin, *The Open Secret: Sketches for a Missionary Theology*, p.9.

葉で言うなら、宣教地において新たに生み出された教会を中心とする宣教理解である。これは、「西洋から非西洋へ」という植民地支配の流れに沿う一方的な宣教への反省に根差している。それまでは、現地に生きる人々の文化や生活習慣を異教的なものとして否定し、新しいものを導入することが大切であるとして、キリスト教とともに西洋文化が入っていった。これは、シェンクの言葉を借りるなら、西洋キリスト教の「模写」の時期であった<sup>22</sup>。この時期の宣教活動の主体性は常に西洋の側にあり、現地の人々はただ受けるのみで、「模写」することが当然のこととされた。

これに対してヘンリー・ヴェンとルフス・アンダーソンは有名な三自原則、すなわち経済的な自給 (self-financing)、政治的な自治 (self-governing)、そして伝道における自発性又は自伝 (self-propagating) という三本柱を提唱し、現地で信仰をもった人々こそが、自立して宣教を行うことの重要性を主張した<sup>23</sup>。この三自原則は、やがて「土着化」という概念に発展し、新たに生まれた教会は、その土地の文化や生活習慣に合ったものであるべきだとして、いままでの単一方向的な宣教の枠組みに対抗する新たな宣教のモデルを提供するに至った。ここで、宣教と教会の新たな関係が築かれていった。すなわち、宣教地で信仰をもった者が主体性をもって自立した教会を形成することこそが宣教の最重要課題とされたのである。

「土着化」は思うように実現しなかったが、教会中心の宣教観はその後、福音派であるか否かに係わらず定着していった<sup>24</sup>。それは、世界宣教協議会

(IMC) の公式な文章に明確に現われている。しかも、教会中心とは対立するとみられている「神の宣教」 (*Missio Dei*) の概念が発表された 1952 年のウィリンゲン会議の文章においてすら、教会中心の宣教観が支配的であったのである<sup>25</sup>。その後、次第に世界宣教協議会が世界教会協議会 (WCC) との関係を探めていくにつれて、教会中心の宣教観から脱却していき、それとは反対に福音派 (特に米国の教会成長運動との関係が深い福音派) は歪んだ形で教会中心的宣教観へ進展していった。宣教の中心に教会があり、その中心に如何に人々が入ってくるかが最も重要な課題となるのである。そこでは、出て行くことよりも人々が入って来ることに関心が集中する。個人を救いに導き、教会に導き入れられる人の数によってその宣教の働きが評価されるようになったことは否定出来ない。もちろん、個人の救いも教会に人が導かれることも、如何に尊い神の業であるかは疑う余地はない。しかし、救いのみ業ではなく、数字的な目標の為の人間的方法論が先行していくなら、本末転倒と言わざるを得ない。教会を中心とする宣教において、教会とは何かが神の前に、またみ言葉の前に真に問われなくなる時、教会中心が人間中心になりかねない。もしそこに残るものが、いったんは主を知りつつも「宣教」を失った内向きの排他的人間集団であるとしたら、今や異文化と言わざるを得ない様な中にいる若い世代に福音を伝えることが出来るのだろうか。これは教会の存続の危機にもつながる重大な問題である。

#### D. 教会を越えた「神の宣教」

教会中心の宣教に警鐘を鳴らしたのが、ホーケンダイクであった<sup>26</sup>。彼は教会と宣教の癒着に危機意識をもち、宣教が教会から区別されるべきであり、

のモデルが西洋から非西洋へという一方向的な宣教に反対の方向を打ちたてたものの、現実には「西洋」対「非西洋」の枠組みそのものからの真の意味での脱却ではなかったのである。シェンク、「文化脈化に向けて」96頁を参照。

<sup>25</sup> Scherer, "Church, Kingdom, and Missio Dei," p.85. Cf. Bassham, "Mission Theology: 1948-1975," p.52.

<sup>26</sup> ホーケンダイク、『明日の社会と明日の教会』。Cf. Scherer, *Gospel, Church and Kingdom*, pp.107-108.

<sup>22</sup> シェンク、「文化脈化に向けて」、87-92頁

<sup>23</sup> ヴェンとアンダーソンによって提唱された三自原則については、シェンク (Shenk) が "Rufus Anderson and Henry Venn: A Special Relationship?" pp.168-72 で詳しく論じている。

<sup>24</sup> 十九世紀以来の宣教学の発展によって、西洋文化中心の「模写」としての宣教から「土着」の教会を中心とした宣教へ少なくとも理論上はシフトされたのである。しかし、この新しい土着化のモデルは多くの場合、理想は現実とのギャップに悩まされた (シェンク、「過渡期にある宣教」17-20頁参照)。それは、「土着化」の基礎となる三自 (Three-Self) 原則そのものが、西洋プロテスタンティズムの価値観に基づいており (Scherer, "Church, Kingdom, and Missio Dei," In *The Good News of the Kingdom: Mission Theology for the Third Millennium*, p.84)、またこ

本来教会が宣教されるのではなく、福音が宣教されるべきであり、教会はその手段にすぎないと論じた。宣教は神が主体をもつのであり、教会を拡張することでは決してないと、強く主張した。もし教会に存在意義があるとするのなら、それは神の国を示す道具としてであり、正しく機能していなければ神は教会以外の手段をもってでも神の国を宣教するというのである。彼は、「教会は伝道（ミッション）の機能である」と明言している<sup>27</sup>。こうした視点においては、教会それ自体に本質的な価値が内在しているとはみなされず、機能性において評価されており、これは教会機能論ということが出来る<sup>28</sup>。

ホーケンダイクが、教会機能論に傾いた背景には、ヨーロッパにおける退廃した教会の姿があった。宣教がもしそのような教会を中心としてなされれば、伝えられた宣教の内容は福音から逸脱したものとなると見たのである。本来の姿から逸脱した教会への危機感の中でボンヘッファーの神学が台頭し、退廃した教会にではなく、現実の世に焦点を当てたいわゆる世俗の神学の強い影響の下、教会と宣教の癒着は受け入れ難いものとなったのだ<sup>29</sup>。ホーケンダイクにとって宣教の中心は教会ではなく、神ご自身であった。神は教会に束縛されていないばかりか、教会を越えて働いているゆえ、神の宣教も

<sup>27</sup> ホーケンダイク、前掲書、91頁

<sup>28</sup> ホーケンダイクの教会観が、實在論的ではなく機能論的に展開されていったことに関しては、バイヤーハウス、『宣教のめざす道—エキュメニカルと福音派の間』、46～48頁、Hoedemaker, "Hoekendijk's Amerian Years," pp.7-8、石田順朗『教会の伝道』、56～59頁を参照。ところで、ホーケンダイクの訳本と最後に挙げた石田の著作『教会の伝道』においては mission を宣教と訳さず、伝道と訳している。よって宣教と伝道は同義語であることを踏まえて読む必要がある。これは、当時、すなわち 1960 年代後半から 70 年代前半に広く受け入れられていた「宣教」の定義に基づいている。

<sup>29</sup> ボンヘッファーは『教会の本質』（森野善右衛門訳 新教出版社、1976年）で、教会の本質的な場は、「この世におけるキリストの現臨の場所」（13頁）であり、「この世界の日常の現実（All-tagswirklichkeit）の全体」（16頁）であるとして、世から隔離されたような組織としての教会の姿を批判し、そこから真の教会を追究した。Aagaard, "Trends in Missiological Thinking During the Sixties," *International Review of Mission*, p.10、森野善右衛門『他者のための教会』、32頁、58～60頁、74頁以下を参照。

教会を越えたところにおいても見い出せるのである<sup>30</sup>。そして、今まで当然とされていた「神—教会—世」という図式を「神—世—教会」とし、教会と世の関係を逆転することで、教会が世という歴史の現実介入し変革出来ない状況に対する苛立ちを表現し、にもかかわらず神が教会を越えて歴史に介入していくという宣教における神の中心性を強調した<sup>31</sup>。教会の存在を宣教の中心から周縁に移し、教会に道具としての機能的価値以上のものが付与されなくなったのだ。

ここで「神—世—教会」の新たな図式をより具体的に描写してみたい。まず、神の宣教の場は教会の中ではなく、その外、すなわち世の現実であると主張された<sup>32</sup>。ここで言う世とは、歴史的現実を指しており、その歴史のただ中で取り組むべき宣教の課題は教会が決めるのではなく、むしろ反対に歴史的現実の方が教会に突きつけてくるのである。よって、教会が世の現実の課題に奉仕することは当然のことであり、その働きを担うことこそ、神の宣教の参与することであると理解される。特に第三世界と呼ばれる宣教の現場においては、貧困、政治的抑圧、非人間的社會習慣など、今までキリスト教が慣れ親しんでいた西洋の中上流階級とは全く異なった現実が目の前にあり、そこでは今までの宣教の在り方が通用しないのである。その戦いのただ中から解放の神学が生まれたのであるが、そのような歴史的現実の中では、世に上から言葉だけで宣教するのではなく、むしろ教会がこの現実の世に仕えていくべきであるとして「神—世—教会」の図式は説得力をもっていった。

<sup>30</sup> この視点はマックス・ウーレンの宣教観とも呼応する。彼は、宣教の歴史の始まりを宣教師の到来以前から見ている。言葉の宣言（Proclamation）以上に神の顕在（Presence）に焦点を当てた宣教観を基礎に宣教をより広い視点で捉え、先行的神の介入が宣教師による宣教以前に神によってなされていると論じた。キリストは誰かによって直接伝えられる以前から、何らかの形で文化や歴史的現実の中に既に隠れて顕在していることを認めることで、異文化イコール否定されるべき異教文化と決めつけずに宣教の為の対話への可能性を開こうとしたのである。See Yates, *Christian Mission in the Twentieth Century*, pp.140—42.

<sup>31</sup> Hoedemaker, "The Legacy of J. C. Hoekendijk," pp.167—68; John R. W. Stott, *Christian Mission in the Modern World*, p.17.

<sup>32</sup> Bassham, "Mission Theology: 1948—1975," pp.52—53.

この新しい図式のもとでは、宣教の中心は、教会を大きくすることや教会に来る人の数を増やすことではない。むしろこの地上に神の国をもたらし、混乱した社会の現実に神の平和（シャローム）が樹立されることである。1960年代に入るとこの宣教観は、福音派における教会中心の宣教観への対決姿勢が濃厚になり、1968年のウプサラの世界教会協議会（WCC）では、両者の亀裂は決定的なものとなった。かつて1952年にウィリンゲンでの世界宣教協議会（IMC）で発表された「神の宣教」（*Missio Dei*）の概念は、次第に世俗的解釈が施されていき、宣教のゴールとして人間化（ヒューマニゼーション）が挙げられるに至り、伝道が見失われていったのである<sup>33</sup>。

当初は、宣教が海外に押しやられ、教会にとっての付属物的扱いを受ける中で、「神の宣教」という概念が発表されたことで、教会自身が神から世に遣わされているということが明確になり、宣教は教会の核を担うものであると捉えられた。いったんは宣教と教会の密接な関係が回復したと見えたが、再びその関係にひびが入ってしまった。それは、ホーケンダイクのもっていた教会機能論が重要な鍵を握っている。機能に焦点を当てるこの教会観は、当時の逸脱した教会の問題を問うことは出来ても、教会の本質を問うことを忘れさせてしまった。さらに、福音派が教会中心の宣教を成功哲学や数の論理で押し進めていく傾向が、いよいよ教会論から目をそらせた要因になったのであろう。教会の成長が問題なのではない。教会が聖書が伝える教会からかけ離れていても気づかないことが問題なのである。また、社会の現実に取り組み、神の国をこの世に実現せしめることが問題なのではない。むしろそれが教会の本質を見失う形でそれがなされたことが問題なのである。「教会を越えた宣教」を主張する中で、教会の外にある社会の問題に取り組むことは

重要である。しかし、社会の問題に目を向けなかった教会を問い直すことから目をそらしてしまったことに問題がある<sup>34</sup>。

### Ⅲ. 宣教と教会の新たな関係に向けて

今まで宣教と教会の関係の四つのタイプを端的に紹介し、簡略な歴史の変遷を辿ってみた。教会の付属物としての宣理解は、宣教が植民地支配的性質を帯びてきたという反省の中で、宣教の主体が教会ではなく、神ご自身に向けられるという、「神の宣教」という視点によって、乗り越えられたように見えた。確かに、「神の宣教」という、新たな視点によって、神が教会を世に遣わすという神中心の宣理解によって、今までの宣教の様々な問題に新たな視点が提供されていった。ところが、この宣理解は、必ずしも教会論との神学的対話や研鑽によって、深められていったとは言えない。それは、その後の宣教と教会を巡る議論の中で明らかになってきている。特に1960年代以後の宣理解の一端を、いくつかの見方をあえて単純化して描写して検証してみると、一方では教会を中心に宣教が捉えられ、他方では宣教の焦点を教会から世にすなわち歴史的現実に移したという第三と第四の理解が浮上する。ところが、1970年代以後、対立や二者択一を乗り越えようとする視点が芽生え始めた。それは1974年の福音派におけるローザンヌ宣教会議や1975年のナイロビでの世界教会協議会における両者の姿勢に見られるようになった。ここでは福音派の視点から、教会と宣教の関係の新たな方向性を端的に模索したい。

第一に必要なことは用語の整理とその聖書的な理解の深化であろう。実りある議論のためには「教会」と「宣教」の定義の問題を避けることは出来ない。まず「教会」であるが、教会中心の宣教観においては、教会とは何かについての考察が欠如しており、数の論理に終始するという批判から逃れることは出来なかった。またホーケンダイクが教会と宣教とを区別しようとする

<sup>33</sup> Newbigin, *The Open Secret*, pp.8ff., Scherer, "Church, Kingdom, and Missio Dei," pp.85-86. 1960年代のエキュメニカル派の宣教神学の動向については、Aagaard "Trends in Missiological Thinking During the Sixties," によくまとまっている。彼は必ずしもエキュメニカルの神学において宣教における教会の存在が見失われてはいないと論じている。確かにIMCとWCCとの統合は宣教と教会の統一をさしていよう。しかし、その後のWCCに支配的になっていった、教会にはなく世に焦点を当てる神学的前提がここで問題なのである。

<sup>34</sup> モルトマン、『聖霊の力における教会』、23～28頁を参照。See also Newbigin, *The Gospel in a Pluralist Society*, p.136; Howard A. Snyder *The Community of the King*,



時、彼が見ていたものは、組織又は制度としての教会であった。神の民としての教会というよりは、その器として教会という面が強い。教会を社会の福音を伝える道具として、さらに社会に変革をもたらす機関として捉える彼の見方は、教会機能論とも呼ばれている。はたして、教会は単に非人格的な機関や制度として捉えきれぬのだろうか。むしろ神の民、すなわち特別に主に選ばれた者の集まりという、共同体の人格という側面を抜きにして、教会たり得ないのではないだろうか。非人格的な制度は信仰をもたない。もつとしたら神の民である。ある特別な制度がこの世に遣わされているのではなく、主に選ばれた特別な民が世に遣わされているのである<sup>35</sup>。もし教会が組織や制度だけなら、教会機能論や成長のための方法論で充分であり、工場の機械同様ある目的の為の利用価値が機能性や実績で判断されよう。従って、第二の「神の宣教」においても、第三、第四のタイプにおいても、教会とは何か（あるいは誰か）ということにたいして、十分な議論がなされず、方法論と機能論に傾いてしまったと言えよう。こうした議論や行動の中で、視野の中に入らなかったこと、それは教会自体の存在意義ではないだろうか。人格的存在は利用価値ではなく、その存在自体の価値が問われるべきことを一人の人間に当てはめることはそれほど難しいことではない。しかし、いったんそれが共同体となると分析的に、機械的に捉えられてしまうのである。教会を見るわれわれの思考の枠組みそのものがまず問われる必要がある。

次に、宣教 (Mission) とは、何をさしているのだろうか<sup>36</sup>。この用語の整理のために、ジョン・ストットは、宣教をより包括的なものとし、その中に「伝道」 (Evangelism) と社会的活動 (Social Action) を内包させている<sup>37</sup>。

pp.68-70.

<sup>35</sup> Snyder, *The Community of the King*, pp.54-64.

<sup>36</sup> 英語の mission は「宣教」とも「伝道」とも訳されてきた。両者を同義語とする立場については、註27を参照。今後日本の宣教学においても、訳語の統一が必要となるであろう。その一つの努力は倉沢正則『『宣教学』とは：序論的考察』にみられる。彼によると mission は、英語まま「ミッション」とすることを提言している。しかし、今後さらにこの用語の整理についての検討の余地は残っていると思われる。

<sup>37</sup> Stott, *Christian Mission in the Modern World*, p.30.

教会中心の宣教を押し進めてきた福音派は「伝道」を宣教における最重要課題とし、教会を越えた世を軸とした宣教観をもつ社会派においては社会的奉仕やその変革を宣教の中心に据えたのである。しかし、その両者を包摂する宣教の定義によって、よりホーリスティックな宣教理解へ前進したことは、一つの重要な宣教学的貢献といえよう。

伝道と社会的責任の関係については、色々な立場があり、様々な分析がなされて来た。例えば、ストットは大まかに、伝道のための手段としての社会的奉仕、伝道の一表現としての社会的奉仕、さらには、伝道と社会奉仕とをパートナーとして見る三つの立場に分けている。また、T. アデヤーノは両者の関係に関する立場を以下のように9つに分類した<sup>38</sup>——1) 社会的活動は、伝道から人々の目を逸らすものである、2) 社会的活動は、伝道への背信行為である、3) 社会的活動こそ伝道 (良い知らせを告げること) である、4) 社会的活動は、伝道の手段である (伝道のために用いられるのなら良い手段)、5) 社会的活動は、伝道の一つの表現である、6) 社会的活動は、伝道の結果として生まれてくるものである、7) 社会的活動は、伝道のパートナーである、8) 社会的活動と伝道は重要度においては等しいが同じ宣教の働きの全く違った要素である、9) 社会的活動は、良い知らせ (伝道) の一部である。

しかし、これらの定義で問題が解決したとは言えない。むしろ裏のある議論へのスタート地点に立ったと言うべきであろう。具体的には、実際、ボッシュは、この宣教の定義の背後には依然として伝道と社会的活動とを明確に区別する二元論的枠組みが存在していると指摘した<sup>39</sup>。すなわち両者がそ

<sup>38</sup> Adeyemo, "A Critical Evaluation of Contemporary Perspectives," pp. 48-57.

<sup>39</sup> Bosch, "Evangelism: Theological Currents and Cross-currents Today," p.100. ボッシュは "An Emerging Paradigm for Mission" (1983) の論文で、宣教の新しいパラダイムの必要を早くから訴え続け、その論考は1991年に完成した *Transforming Mission* (『宣教のパラダイム転換』) では宣教の神学を支えてきたパラダイムの分析、そして、20世紀に入って次々と登場した宣教の新たなパラダイムを幅広く紹介している。しかし、宣教と教会の関係に関してはまだ十分な分析がなされていない。シェンクは "The Role of Theory in Mission Studies," pp.31-45 で、宣教学においては今だにパラダイムの危機が続いていると論じており、それは今日にお

れぞれは独立した二つの部門として区別され、対立したものとして捉えられる傾向が強いゆえ、両者の生きた係わりが見失われやすくなる。宣教において、どちらかが優先され、どちらが二次的なものかではなく、両者を一つの働きの二つの側面として如何に係わっているかを捉える必要があると、ポッシュは主張した<sup>40</sup>。

もし、教会中心的に伝道のみを宣教が傾けば、歴史的現実から遊離した教会に、歴史的現実から避難する形で多くの人が集められるであろう。しかし、それで教会が真にこの世に派遣（ミッション）されたといえるのだろうか。それで本当の教会といえるのだろうか。逆に、もし社会的活動を宣教の中心に据え、教会の社会における機能としてみていくことに終始するならば、その機能が社会変革において実現されていけば、役割を果たしおえれば、教会の存在は不要となりはしないだろうか。世に遣わされ神の宣教の業を担うのは、プログラム、組織や制度ではなく、神を信じ神に祈る「神の民」であるはずである。もちろん、「見える組織やプログラムなどなくても宣教の使命を全う出来る」と考えることは、傲慢な理想論であろう。逆に社会奉仕や社会変革そのものが目的となって、その組織や制度の機能性にのみ目が向けられれば、そこに神の宣教をになう神の民の存在意義は見失われてしまう。

教会は、それは建物、場所や制度としてではなく、神に召された民として、神の国をこの地上に現実化する存在として、不完全であってもその存在そのものにかげがえのない意義があるのではないだろうか。そしてその教会がこ

いても同様であろう。

<sup>40</sup> 今までの二元論的枠組に代わる新しいパラダイムに向けての試みの一つとして1980年代に福音派で注目を集めてきているのは、「神の国」を契機とした宣教理解である。Cf. John Driver, "The Kingdom of God: Goal of Messianic Mission," pp.83-105; Arthur P. Johnston, "The Kingdom in Relation to the Church and the World," pp.109-133; Scherer, "Church, Kingdom, and Missio Dei." この神の国という枠組みの中で教会や宣教をもう一度捉え直そうとする動きはもともと神の宣教（Missio Dei）との係わりで登場してきたが、この概念の世俗的解釈が進むにつれて、福音派には受け入れ難いものとなってしまった。しかしローザンヌ以来、より包括的な宣教理解が導入されることで、再び「神の宣教」という視点が福音派においても見直されてきたのである。

の世に派遣されているのであり、それは神学的な抽象論ではなく、具体的な一つひとつの教会が一つひとつの地域に遣わされているのである。従って、神の宣教にとって教会の存在はどんなに小さくとも、不完全であり、社会を変革することが今の時点で見られなくても、神がその存在を通じて神のみ国をこの地上に実現する使命を付与した以上、他に代用することのできないかけがえのない存在として、その地におかれているのである。

本論文では、四つの宣教と教会の関係を素描してきた。宣教を教会の付属物する見方へのパラダイムシフトとして、「神の宣教」という第二の視点が提供された。ところが、その視点が、それが教会論との関係で深められなかったことが大きな問題だといえないだろうか。ホーケンダイクにおける「神の宣教」への世俗的解釈によって、聖なる教会の存在意義が見失われ、教会成長論においても、結局教会の大きさに焦点が当てられ、本来の教会への洞察が欠落してしまうのである。その意味で、今後の宣教学で求められるのは、「神の宣教」の理解がより教会論との関係で深められることであろう。それは、単に全く別々の神学の領域を合わせればよい、ということではない。むしろ、教会について、もう一度神の宣教から見直す必要があり、宣教も神が誰を何のためにどこに遣わすのかという、聖書が伝える「神の民」や「神の国」という枠組みから見直すことが必要とされているのではないだろうか。最近、教会を宣教との関係で捉え、*missional church*として表現しつつ「遣わされる教会」、「神の宣教に与る教会」としてその理解を深めようとする視点が現われ始めている<sup>41</sup>。「神の宣教」は教会が真の意味で教会となることに

<sup>41</sup> Van Engen, *God's Missionary People* は、バルトの和解論にある教会論を基盤にして、最近の物語神学などの視点を援用しつつ、宣教と教会の接点を論じている。日本では、森野善右衛門の『派遣される教会』などにこうした視点がバルトやボンヘッファー、さらにH. クレーマーなどの宣教学者の視点から論じている。最近では、D. L. Guder, *Missional Church* がアメリカをコンテキストとして宣教的な教会論を展開している。V. Kärkkäinen は、*An Introduction to Ecclesiology*, の151頁以下において、*missionary ecclesiology*の代表的神学者としてL. Newbiginを挙げている。今後、こうした著作で扱われている議論を丁寧に整理しながら、宣教的視点を奪わしめる教会論の問題や教会論を見失わせる宣教論についても問われる必要があるだろう。

よって前進するのではないだろうか。もしそうだとしたら、教会の牧会は、宣教に欠かすことのできない中心的課題である。同時に、社会を変革する宣教の最前線こそ、教会が真に直面している課題であることにも気づかされる。そのことを聖書は見事に「神の民」「キリストの体」「神の国」という言葉において描き出さしている。教会や宣教をカテゴリー的に捉える西洋的分析的思考によるのではなく、むしろ素朴に表現される聖書そのものから捉えようとするとき、包括的で豊かな宣教／教会理解に導かれるのではないか<sup>42</sup>。

「宣教とは、世の現実の歴史に介入していき、その世を変革することなのだろうか。それとも、失われた魂を救い出し教会に導き入れることなのだろうか。」「世に出て行くことなのだろうか、教会の中に招き入れることなのだろうか。」このような二者択一の間がどれだけ投げかけられて来たことであろう。今問うべきは、どちらがより大切なのか、ではない。そういう問いを続けてきたわれわれ自身を問い直すべきであろう。事実、宣教を失った教会も、教会を見失った宣教も、結局は命を失って来たのである。しかし、神の民(教会)が、歴史の現実のただ中に神によって遣わされ(mission)るなら、そして、もし遣わされた(mission)ものが真の意味で神の民(教会)であるならば、個人においても、家族においても、地域においても、国家においても、世界においても、それぞれの現実の歴史は造り変えられるに違いない。

#### 参考文献

- Aagaard, Johannes. "Trends in Missiological Thinking During the Sixties." *International Review of Mission* vol.62, pp. 8-25, 1973.
- Adeyemo, Tokunboh. "A Critical Evaluation of Contemporary Perspectives." in *In Word and Deed: Evangelism and Social Responsibility*. Bruce J. Nicholls, ed., pp.41-62. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1985.
- Bassham, Rodger C. "Mission Theology: 1948-1975." *Occasional Bulletin of Missionary Research*, vol. 4 no. 2, pp. 52-58, 1980.
- バイヤーハウス、ピーター 『宣教のめざす道—エキュメニカルと福音派の

<sup>42</sup> これについては、D. L. Guder, *Missional Church* の8章を参照。

- 間』いのちのことば社、1973年
- ボンヘッフアー、ディートリヒ 『教会の本質』 森野善右衛門訳 新教出版社、1976年
- Bosch, David J. "An Emerging Paradigm for Mission," *Missiology* vol.11 no.4, pp.484-510, 1983.
- . "Evangelism: Theological Currents and Cross-currents Today," *International Bulletin of Missionary Research* vol.11 no.3, pp.98-103, 1987.
- . "In Search of a New Evangelical Understanding," in *In Word and Deed: Evangelism and Social Responsibility*. Bruce J. Nicholls, ed., pp. 63-83. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1985.
- ボッシュ、デイヴィッド J. 『宣教のパラダイム転換』 上下巻 東京ミッション研究所訳 新教出版社 1999/2001年
- Castro, Emilio. "Mission: An Ecumenical Perspective." *Mission Focus* vol.7 no.3, pp.46-48, 1979.
- Driver, John. "The Kingdom of God: Goal of Messianic Mission," in *The Transfiguration of Mission: Biblical, Theological and Historical Foundations*, Wilbert R. Shenk, ed., pp.83-105. Scottdale, PA: Herald Press, 1993.
- Dulles, Avery *Models of the Church*, Garden City, NY: Doubleday, 1987.
- Guder, Darrell L., et. al. *Missional Church: A Vision for the Sending of the Church in North America*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1998.
- Hall, Douglas John. *The End of Christendom and the Future of Christianity*, Valley Forge, PA: Trinity Press International, 1997.
- Hoedemaker, Libertus A. "Hoekendijk's American Years," *Occasional Bulletin of Missionary Research* vol.1 no.2, pp.7-10, 1977.
- . "The Legacy of J. C. Hoekendijk," *International Bulletin of Missionary Research* vol. 19, no.4, pp.166-70, 1995.
- ホーケンダイク、J. C. 『明日の社会と明日の教会』 戸村政博訳、新教出版社、1986年
- 石田順朗 『教会の伝道』 聖文舎、1972年
- Johnston, Arthur P. "The Kingdom in Relation to the Church and the World," in *In Word and Deed: Evangelism and Social Responsibility*, Bruce J. Nicholls, ed., pp.109-133. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1985.
- Kane, J. Herbert. *A Concise History of the Christian World Mission: A Panoramic View of Missions from Pentecost to the Present*, Revised ed. Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1982.
- Kärkkäinen, Veli-Matti. *An Introduction to Ecclesiology: Ecumenical, Historical and Global Perspectives*. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2002.
- 倉沢正則 「『宣教学』とは：序論的考察」『宣教学リーディングス—日本

- 文化とキリスト教』 福田充男編、18-34 頁、RAC ネットワーク、2002 年
- モルトマン、J. 『聖霊の力における教会』 喜多川信・藤井政男・頓所正訳 新教出版社、1981 年
- 森野善右衛門 『他者のための教会』 新教出版社、1980 年
- . 『派遣される教会』 新教出版社、1988 年
- Newbiggin, Lesslie. *The Open Secret: Sketches for a Missionary Theology*, Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1978.
- . *The Gospel in a Pluralist Society*, Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1989.
- . *Truth to Tell: The Gospel as Public Truth*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1991.
- 西岡義行 「教会成長論再考」 『宣教学リーディングス——日本文化とキリスト教』 福田充男編、349-68 頁、RAC ネットワーク、2002 年
- Scherer, James A. "Church, Kingdom, and Missio Dei," In *The Good News of the Kingdom: Mission Theology for the Third Millennium*, Charles Van Engen, Dean S. Gilliland, and Paul Pierson, eds. pp. 82-88. Maryknoll, NY: Orbis Books, 1993,
- . *Gospel, Church and Kingdom: Comparative Studies in World Mission Theology*, Minneapolis, MN: Augsburg, 1987.
- Shenk, Wilbert R. "Rufus Anderson and Henry Venn: A Special Relationship?" *International Bulletin of Missionary Research* vol.5 no.4, pp.168-172, 1981.
- . "The Role of Theory in Mission Studies," *Missiology* vol.24 no.1, pp.31-45, 1996.
- . *Write the Vision: the Church Renewed*. Valley Forge, PA: Trinity Press International, 1995.
- シェンク、ウィルバート R. 「過渡期にある宣教」 『これからの日本の宣教』 1-10 頁、東京ミッション研究所編 いのちのことば社、1994 年
- . 「文化脈化に向けて—現代の宣教パラダイムにおける三段階」 『これからの日本の宣教』 81-108 頁、東京ミッション研究所編、いのちのことば社、1994 年
- Snyder, Howard A. *The Community of the King*, Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1977.
- Stott, John R. W. *Christian Mission in the Modern World*, Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 1975.
- Van Engen, Charles E. *God's Missionary People: Rethinking the Purpose of the Local Church*, Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1991.
- . *Mission-on-the-Way: Issues in Mission Theology*. Grand Rapids, MI:

- Baker Book House, 1996.
- Verkuyl, J. *Missiology: An Introduction*, Trans. Dale Cooper. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1978.
- Yates, Timothy. *Christian Mission in the Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge University Press, 1994.

(東京聖書学院教授、東京ミッション研究所総主事)